

〈書 評〉

ジャン＝フランソワ・リオタール著 星野太訳

『崇高の分析論—カント『判断力批判』についての講義録』

(法政大学出版局、2020年)

円谷 裕二

本書は Jean-François Lyotard, *Leçons sur l'Analytique du sublime : Kant, Critique de la faculté de juger*, §23-29 (Paris, 2015年) の全訳であるが、原書の初版は1991年である。訳者によれば、「フランスの高等教育における伝統的な精読の作法たる『エクスプリカシオン・ド・テキスト (explication de texte)』をみずから任ずる本書は、カントの『崇高の分析論』をあくまでテキストに即して読もうとする読者にとって、これ以上ない手引きである」(354—本訳書頁数、以下同様)。しかしテキストの精読とは言え、どんな精読もまたおのずと一つの解釈であらざるをえないように、本書のうちにも、リオタール独自の解釈や言い回しが多々散見されるのも事実である。以下においては、一方にカントのテキストを、他方にそれについてのリオタールの精読および解釈を見据えながら書評することにしよう。

著者によれば、「この講義の作法は……『エクスプリカシオン・ド・テキスト』 [= 精読] と呼ばれていたものだ。その決まりごとのひとつは、外的な資料を用いることなく、当のテキストのなかにその説明を見いだすことにある。……<崇高の分析論> が要請するところにしたがひ、言及対象は三つの『批判』全体に拡張した」(1f. — [] 内補足は書評者、以下同様)。ひたすらカントのテキストそのものに即しながらそのうちに分け入ろうとする著者の基本姿勢のために、本書は、通常の哲学書や論文のように、論理的筋立てのもとで結論を論証するというたぐいのものではない。そのために本書の内容を明確な論点や見解へ向けて要約したり論評したりすることはほとんど不可能だと言ってよく、また著者自身もそのような意図のもとに本書を執筆しているわけではない。本書の目的については次のように記される。「カントのテキストから感情の抗争 *un différend*—それはまた抗争の感情でもある—をめぐり分析を抽出し、その感情のモチーフを(批判を含めた)あらゆる思考をその限界へと導く恍惚へと結びつけることをめざしている」(2)。この点で本書は、彼の主著の一つである“*Le Différend*”(1983年、邦訳名『文の抗争』)の延長線上に位置するものと見なすことができる。

カントの崇高論においては、周知のように、「美感的」な「表出 (*Darstellung*, *présentation*)」能力である構想力のパートナーとしては、美の場合の悟性に代わって理性が登場するが、そのさい理性が構想力に対して、理念である全体 = 無限 = 絶対性を一挙に「美感的に総括すること」(156)を要求してくることによって、崇高な感情が引き起こされる。しかし構想力は、あくまでも対象の形式の限定に関わる能力であるかぎり、無限・「無形式性」(KU247—『判断力批判』アカデミー版頁数、以下同様)・「無限定性」(KU244)の表出は不可能であり、表出の拡張への理性の要求ないし命令のために構想力は表出の最大量(尺度)に直面する。「この尺度こそが、表出する思考の絶対量、『美感的に』可能な大きさの絶対量なのである」(176, Vgl. KU251)。かくして、崇高においては二つのまったく異質な絶対的なもの「抗争」、すなわち「無限なものに属する[理性の]絶対性と、有限なものに属する[構想力の]絶対性」、ないし「思考が着想をおこなう *concevoir* 場

合の絶対的全体性と、思考が表出をおこなう場合の絶対的尺度」(176)との「対立」、「快と不快、牽引と反発」の対立が生じているのであり、それゆえまた崇高の感情は美の「積極的快」とは異なり「否定的快」(KU245)とも呼ばれる。

リオタールは、カントの崇高論の核心に潜むものとして「抗争 *différend*」すなわち「抵抗 *Widerstand*」(KU258)をことさら強調する。美における構想力の「自由な遊び」と悟性との調和ないし一致とは異なり、崇高における構想力と理性の対立 *confrontation*・衝突 *conflict* である。ちなみに「抗争」は、反省的判断力に特有のものであり、それは対立の解消のために予め与えられている規則＝法律ないし第三者を前提する規定的判断力の関わる訴訟＝「係争 *litige*」とは明確に区別される。

「抗争」はそれ自身としては「不快」であり「反目的」であるが、崇高の感情は、美と同様にあくまでも「適意 *satisfaction*, *Wohlgefallen*」に関わる美感的判断であり、合目的な快の感情である。それゆえカントの「批判」は「抗争」を「解決」するために、上記のまったく「異質」な二つの「絶対的なもの」を統一しようとするのだが、それが「(関係と様相というカテゴリーに結びつけられた)力学的総合の役目である。……絶対に異質なこれら二つのもの、およびその総合は、崇高な感情の可能性の条件として、ア・プリアリに必然的である」(176f.)。かくして崇高論での核心的問題とは、「抗争」の「総合」がいかにして可能なかを明らかにすることである。リオタールは「抗争」を強調するみずからの立場を際立たせるために、それとは似て非なる他のいくつかの解釈を挙げつつそれらを批判している。

①倫理的解釈、ないし崇高感情を道徳感情に還元する解釈への批判

「崇高なものについての判断は(実践的)理念に対する感情の素養のなかに、言い換えれば道徳感情の素養のなかにみずからの基礎を見いだす」(KU265)。「崇高な『心の情調』は『規定された(実践的な)理念の影響を感情にもたらす情調』に適合する」(177, KU256)。

しかしながら『判断力批判』におけるこれらの引用箇所からは、「(実践的)」という丸括弧の表現のうちにカント自身の「ある種のためらい」(169)が見て取れる。崇高感情の道徳感情への還元については、「<崇高の分析論>においてさらに先まで展開されていないのだとすれば、つまるところその理由は、崇高な感情が道徳感情と同一視されうるものではないからである。というのも…… [道徳法則に対する] 尊敬は美感的感情ではないからである(本書第七章)」(169f.)。「尊敬を感じるとる思考は<意欲する>思考、<欲求する>思考であり、[他方、崇高の感情は]<表出する>思考、<構想する>思考」(168)なのだ。『判断力批判』「序論」末尾の「心有能力」の区分(KU198)に従えば、崇高は快不快の感情に属し、尊敬の道徳感情は感情とは言えその根源は道徳法則に関わる欲求能力であり、また崇高の場合の理性の理念は「絶対的全体」(170)であるが、尊敬の場合の理念は「絶対的原因性ないし自由」(169)である。

②弁証法的解釈への批判

崇高という感情あるいは判断に関しては「弁証法的読解」(182)がカントのテキストからも可能であるように思われるかもしれない。たとえば、崇高の感情は「不快を媒介とすることによってのみ(*nur vermittelt einer Unlust*)可能な快」(KU260)であり、「構想力という能力の非合目的性も、理性理念とその覚醒にとっては、やはり合目的なものとして表象される」(183, KU260)。あるいは崇高の感情を引き起こすきっかけとなるのは、「我々の判断力にとって反目的 *zweckwidrig* であり、表出能力に不適合 *unangemessen* であり、構想力に対して暴力的 *gewalttätig*

であるが、しかしながらこのことがよりいっそう[合目的的で]崇高だと判断されるのだ」(KU245)。

『判断力批判』からのこれらの引用は、理性に対する構想力の「反目的性」「不適合性」「被暴力性」が、崇高の快の感情や合目的性にとって必然的で不可欠な契機 moment であり、最終の崇高感情の前では消え去ってしまう(止揚される)ものなのだ、という弁証法的解釈を誘発するのである。つまり「<構想力と理性の関係は、合目的ではない、ゆえに不快である>……ことを、<合目的である、ゆえに快である>へと転じる」(183)のであり、「理性という思考の絶対的な自己肯定が、構想力というみずからの否定性を乗り越える(そして保存、解消、「止揚」する)のだ」(184)。

しかしながら、リオタールによれば、「この読み方は、批判的[カント的]ではなく、思弁的[ヘーゲル的]であり」「衝突状態にある二つの[異質な]能力を合目的化されたプロセスのきっかけ moments とすべく、両者を『同質的な』ものへと転じてしまっている」(184f.)。この弁証法的解釈の軽率さは、「理性の絶対性に対して構想力の絶対性を、あるいは理性の『全体としての無限』に対して構想力の『最初の尺度』を相対化してしまう。実のところ、この『軽率さ』の核心は、構想力から理性への移行を正当化する第三の審級を、両者のあいだに認めてしまうところにある。まるで第三『批判』の全体を支配している問い、まさしく[自然概念から自由概念への]この『移行』の問いが、あたかもその解決策をはじめから知っていた、とでも言わんばかりに」(185)。かくして著者は、崇高における構想力と理性の「抗争」の「総合」を、弁証法的な総合とは異なり、異質な二つの絶対的なものが同質化されたり共通の第三者のもとに包摂されるのではない仕方での「総合」として理解しようとする。

③趣味と崇高の並行関係の問題性

「衝突の性格、すなわちけっして解決にいたらないというその性格にもかかわらず、……形式を表出する能力[=構想力]と、理念を着想する能力[=理性]とを、[カントの]批判が趣味にかんして作り上げた構想力と悟性の一致というモデルのもとで、和解させる」(177)。美と崇高のあいだに並行関係を認めようとするこの解釈は、確かにカント自身の言葉からも示唆される。すなわち、美の判定における構想力と悟性の一致「と同じように、美感的判断力は、ある事物を崇高なものとして判定する際、その同じ能力[=構想力]を理性と関係づけ、理性の理念と……主観的に合致させる」(KU256)。

しかしながらこの解釈では、「美と崇高の並行関係をでっち上げ、……崇高における理性と構想力の対決 *affrontement* は、悟性と構想力のあいだの穏やかな係争 *litige*」の「枠内に収まってしまうようにも見える」(178)。言い換えれば、絶対的なものを表出せよという、構想力に対する理性の暴力的要求がたんに構想力に対する「同盟の申し入れ」(178)にすぎないものになってしまう。それゆえ、美をモデルとした崇高の解釈はあくまでも単なる類比にすぎず、構想力と理性の「抗争」は構想力と悟性の「一致」に還元されるものではない。なおこの論点については、本書第七章「美と崇高における美感的なもの倫理的なもの」で詳論されている。

以上のように、リオタールは、「崇高の感情の可能性の条件」である「抗争」の「総合」についての上記の諸解釈を批判することによって、みずからの立場を際立たせようとしている。それでは彼のより積極的な見解とはそもそも何なのであろうか。しかしこの問いに答えることはもはや「エクスプリカシオン・ド・テキスト」を越えてしまうとでも言わんばかりに、本書からはその答えを詳らかに読み取るのは難しいと言わざるをえない。さらには、彼がカントの崇高論での構想力

と理性との「抗争」をみずからの「抗争」の哲学に引き寄せて解釈しようとしているが、はたしてこのような読解がカントの崇高論のテキストに忠実であるのかも大いに問題であろう。